

シリーズ「遺跡を学ぶ」

173

弥生の交易と ものづくり

青谷上寺地遺跡

湯村 功

新泉社



弥生の交易と ものづくり

―青谷上寺地遺跡―

湯村 功

【目次】

第1章 弥生人骨と脳の発見	4
---------------	---

1 弥生人の脳が残っていた！	4
2 散乱して出土した人骨	9
3 殺傷痕や病変のある人骨	13
4 埋められた人骨の謎	16

第2章 青谷上寺地遺跡の発掘と集落像	18
--------------------	----

1 遺跡の立地	18
2 発掘調査の歴史	19
3 中心域と遺跡の変遷	22

第3章 地下の弥生博物館	28
--------------	----

1 相次いだ新発見	28
2 多種多量、保存状態のよい出土遺物	29
3 集落構造をさぐる	54

第4章 交易拠点としての港湾集落	71
------------------	----

1 もうひとつのキャッチフレーズ	71
2 どこで交易をしていたのか	72
3 交易拠点ならではの祭祀	84
4 集落の終焉と青谷上寺地遺跡の意義	87

第5章 青谷上寺地遺跡のこれから	89
------------------	----

参考文献	92
------	----

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 弥生人骨と脳の発見

1 弥生人の脳が残っていた！

「湯村さん、大変なものが見つかった。」

二〇〇〇年六月のある夜、現場事務所に居残っていた私に、鳥取大学医学部の井上貴史教授（当時）から電話がかかってきた。日本考古学史上初となる「弥生人の脳」発見の第一報であった（図1）。

この年、鳥取県鳥取市の北西沿岸部にある青谷上寺地遺跡の第一次発掘調査は三年目を迎えていた（図2）。四月から掘り始めていた調査区（県道調査区八区）からは大量の人骨が散乱した状態で出土しており、出土位置の記録や取り上げ方法については、井上教授と相談しながら発掘を進めていた。出土した人骨は水洗いして大学へ運び、井上教授のもとで整理、分析をしていたことになるが、井上教授からは、頭蓋骨だけは水洗いせず土がついたまま

大学へ届けるよう指示されていた。頭蓋骨は顔面部分など脆いところが多いため、井上教授自らが水洗いしたいとのことであった。

この夜、頭蓋骨の水洗いをしていた井上教授が、頭蓋内にたまった土を慎重に掻き出していたところ、何か白っぽいものが混じっていることに気づいた。それが脳の一部だったとわかった井上教授は、これをどう保存すべきか思いをめぐらせ、小雨の降るなか、傘も差さずにさまよったという。

人骨の時期はいつか

遺跡の発掘調査によって新たな発見があったときは、記者発表をおこなう。発見された事柄の詳細な情報、類例、意義などを、テレビや新聞などを通して一般の方々に知ってもらうためである。通常の発見とはいささか趣を異にするが、弥生人の脳発見についても記



図1 ● 弥生人の脳

みつかった3体分の脳のうち、もっとも保存状態がよかったもの。表面のしわがみえる。前頭葉の部分が残っていた。40～50代男性のもので、重量は230g。

生時代後期後葉（紀元二世紀後半）のものと
らえていた。とはいえ、脳の発見という前代未
聞の事態である。万が一にも新しい時代の人骨
が紛れこんでいたなどと、あとから訂正するよ
うなことは避けたい。そこでSD 38から出土し
た大量の土器をすべて再チェックすることとし
た。該当する土器は整理作業員さんによって水
洗いや接合といった作業をすべて終えており、
別の作業をするスペースを確保するため、発掘
調査報告書に掲載する一部の土器をのぞいて、
いったん倉庫の奥にしまいこまれていた。これ
をもう一度引っ張り出し、作業台の上に並べて
もらうのは大変な作業であるが、記者発表に向
けて人骨と一緒に出土した土器を再チェックす
ることは必須の作業であった。しかし脳が発見
されたことは、事実関係などをきちんと整理で
きるまではごく限られた関係者しか知らないこ
とであり、本当の目的を言うわけにはいかなか

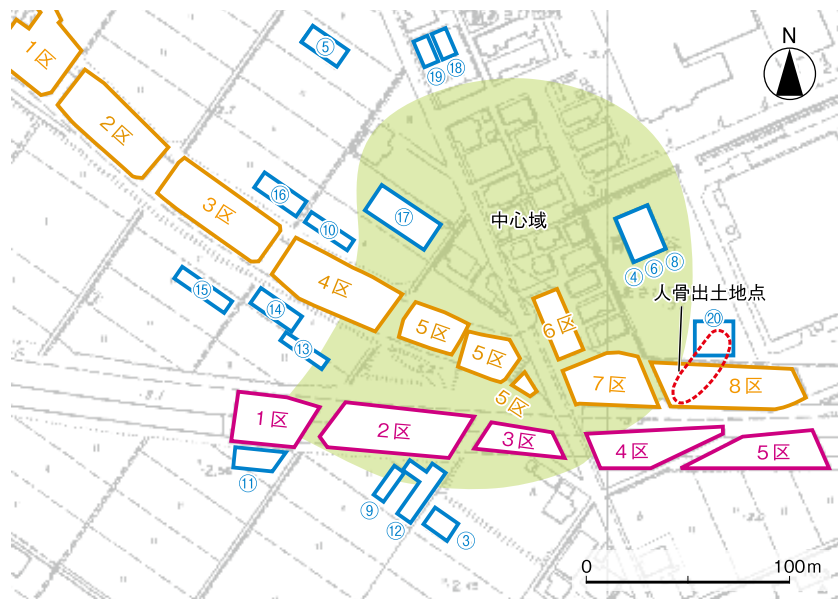


図3 ● 青谷上寺地遺跡の調査区

黄色の囲みは第1次県道調査区（1～8区）、赤色の囲みは第1次国道調査区（1～5区）。
青い囲みは第2次調査以降の調査区で鳥取県が発掘調査をおこなったところ。

者発表をおこなうことにな
った。
脳についての所見などは、
井上教授に発表を委ねるし
かない。記者発表をおこな
うに当たり私たち発掘担当
者がすべきことは、脳が残
っていた頭蓋骨をふくむ大
量の人骨がいつごろのもの
なのかを明らかにすること
であった。
大量の人骨は、遺跡の中
心域とよんでいる少し小高
いところの東側に位置する
溝（SD 38）に埋められて
おり（図3・図14参照）、発
掘現場の判断では、一緒に
出土する土器の特徴から弥

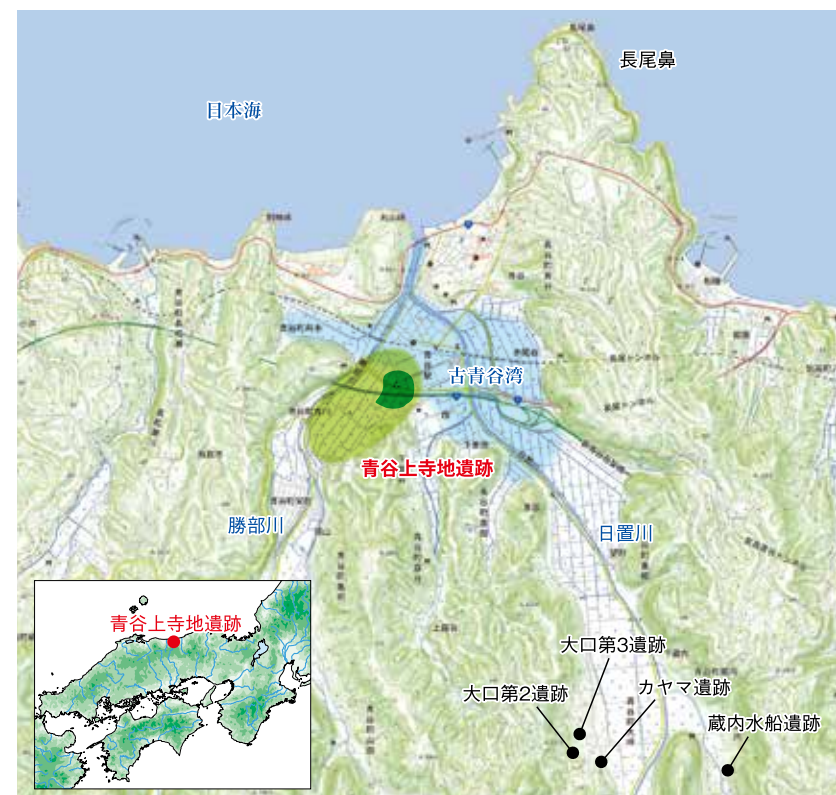


図2 ● 青谷上寺地遺跡と周辺の地形

火山噴出物起源の丘陵が勝部（かちべ）川と日置（ひおき）川により開析されており、そ
の河道に沿ってせまい平野が広がる。青谷上寺地遺跡は両河川の合流部付近にある。河口
の東には長尾鼻という岬が日本海に突き出ている。

った。私は心のなかで整理作業員さんに詫びながら、別の口実を設け、しまいこんだ大量の土器を再び並べてもらった。こうして土器の再チェックをおこない、人骨が弥生時代後期後葉のもので間違いないことを確かめたのであった。

異様な雰囲気の記事発表

二〇〇一年四月、井上教授同席のもと、脳発見について記者発表をおこなった(図4)。脳は大量の人骨のうち三点の頭蓋骨に残っていたこと、電子顕微鏡による調査で、神経細胞からのびる神経突起を取りかこむミエリン鞘とよばれる構造物が残っており、神経ネットワークが確認されたこと、古代人の脳がみつかったのは日本でははじめてで、世界でも四例程度しかないこと、脳は弥生時代後期後葉のものであることなどが発表された。記者発表会場には多くのマスコミ関係者がつめかけ、緊張と興奮が入り交じったような、なんともいえない異様な雰囲気が漂っていたことをおぼえている。

2 散乱して出土した人骨

人骨が出土したSD 38

大量の人骨が出土した溝(SD 38)は、県道調査区八区から国道調査区四区にかけて検出された(図5)。人骨が出土したのは県道調査区のみで、国道調査区では出土しなかった。溝のなかには矢板などを列状に並べた護岸施設が複数列築かれており、それらは何回かつくり替えられていた。護岸施設の構造や深さなどにより、SD 38はSD 38-1からSD 38-3の三段階に分けられ、人骨はSD 38-2にふくまれていた。この段階ではすでにSD 38は埋没しつつあり、人骨が埋められた場所は窪地状となっていたと思われる。大量の人骨は、護岸施設の東側に沿うように、長さ一三メートル、最大幅五メートルの範囲から出土した。

出土状況をどうやって図化するか

通常、弥生時代の人骨は木棺墓や土墳墓などの埋葬施設から出土し、頭から足先まで本来の位置を保っていることが多い。ところが青谷上寺地遺跡の場合は、さまざまな部位の骨が折り重なるように散乱しており、同一人物のまとまりをとらえるのは困難であった(図6)。

発掘調査では遺物の出土状況を図面として記録する。人骨も遺物であり、散乱した状況を図化しなければならない。当時はデジタル化も導入されつつあったが、図化の基本は手描きであった。図化するのに一体どれだけの時間がかかるのか、そのあいだ現場作業員さんの仕事をど



図4・弥生人の脳発見についての新聞記事(毎日新聞2001年04月16日夕刊)

弥生人の脳発見については新聞やテレビなどで大きく取りあげられた。発表後、県内や東京などで脳の展示をおこなったところ多くの来場者を集めた。

何人分の骨が埋まっているのか

第一次調査から二一年経った二〇二二年度から二〇二三年度にかけて、第一次調査県道調査区八区の北側隣接地で新たに発掘調査がおこなわれた（第二〇次調査、図3参照）。SD38のつづきを検出して人骨分布域の広がりを確認するためである。予測どおりこの調査区においてもSD38が検出され、そこから約六五〇点の人骨が散乱した状態で出土した。第一次調査も第二〇次調査も地下深く掘



図6 ● 人骨の出土状況

竹串は人骨の出土位置を示している。人骨は土器や木片などの遺物と一緒に出土し、発掘現場は足の踏み場もない状態であった。

苦心の末に取り上げた人骨は約五三〇〇点、少なくとも一〇九体分であった。男女の別は男性がやや多いようで、頭蓋骨から推定される年齢は、男性は三〇〜五〇代、女性は二〇〜四〇代が多い。頭蓋骨は三二点出土し、このうち三点に脳が残っていた。平均的な身長は大腿骨などの長さから、男性が約一六二センチ、女性が約一四八センチと推定された。

う回そうかと途方に暮れたが、井上教授の意見はこうであった。

「人骨を露出させたままだと傷んでしまうから、早く取り上げた方がいい。それに骨のかたちがわからない人が描いても正確な図面にはならない。」

結局、人骨が出土する範囲を五〇センチ四方の区画に分け、人骨が露わになった状態で一点ごとに取り上げ番号を付したスケッチを描き、スケッチと出土状況を写真に撮りながら掘り進めることになった。正確な出土状況図は、その写真などをもとに井上教授に作成していただくことになった。こうした方法で、できるだけすみやかに人骨を取り上げていくよう努めたが、取り上げたその下からつぎつぎと別の人骨が出てくるため、取り上げ作業には一カ月以上を要することとなった。最終的にまとめられた図を見ると、大量の人骨が散乱していた状態がおわかりいただけると思う（図7）。



図5 ● 人骨が出土したSD38（北側から撮影）

中心域東側をめぐる区画溝。中心域側には矢板を打ちこんだり、長い板を据えて杭で固定するなど、土が流出しないための護岸が施されていた。人骨は護岸東側の窪地から出土した。

り下げるため、調査区外周の壁が崩れないよう傾斜を設けながら発掘調査をおこなった。このため両調査区のあいだには一〇メートルを超える未発掘部分がある。ここにも人骨が埋まっていることは確実で、第一次調査と同じ密度と仮定すると、SD 38全体で二〇〇体以上になる可能性がある。第二〇次調査の密度はそれほどではなかったため、さすがにそこまでは増えないかもしれないが、かなりの人数分の人骨が埋まっていることは間違いなさそうである。

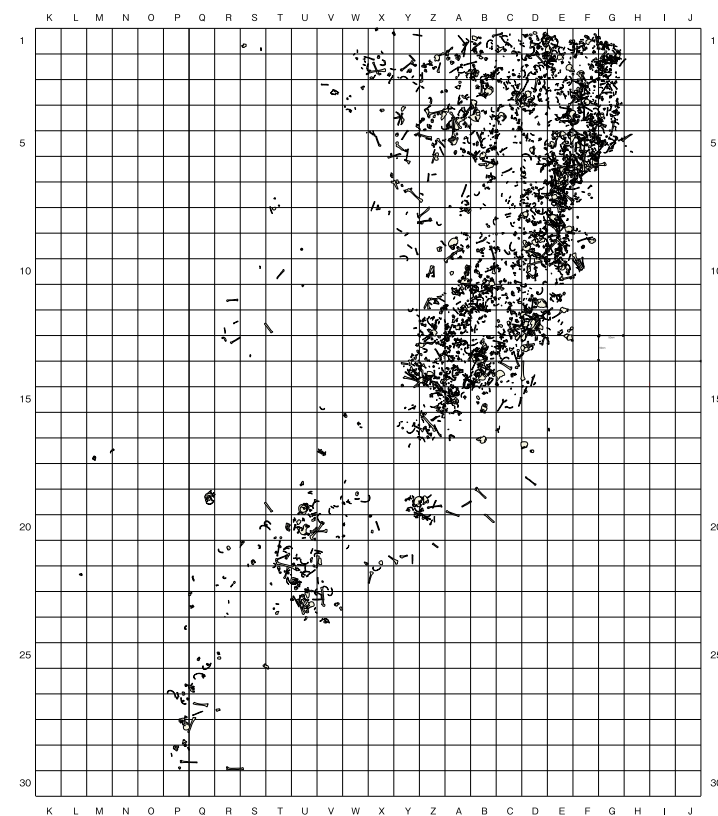


図7 ● 人骨の出土状況図

現場で作成したスケッチと写真をもとに人骨の出土状況を描き直したもの。ひとつの区画は50 cm四方。人骨は図の上（北側）に集中していることがわかる。

3 殺傷痕や病変のある人骨

傷を負った人びと

井上教授の調査によって、五三〇〇点の人骨のなかに傷を負ったものがみつかった。数にして一一〇点、少なくとも一一〇体分である。確認された傷は鋭利なもので切りつけられたり、突き刺されたりしたもので、青銅製の鍬が刺さった状態のものも四点みつかっている（図8）。受傷部位は、胴体を中心に頭、腕、脚と全身におよび、治癒の痕跡が認められたものは一点にすぎないことから、受傷後まもなく死亡したと思われる。こうした人骨は殺意をもって傷つけられたものと考えられることから、殺傷痕人骨とよんでいる。



図8 ● 殺傷痕人骨

上の頭蓋骨の額には何かを突き刺した傷がある。下の寛骨（骨盤の一部）には青銅製の鍬が刺さっている。